

文亀二年（一五〇二）七月三十日、瀕死の床で、宗祇は夢をみていた。ゆり動かされて目覚めると、「ただ今の夢に定家卿に会ひたてまつりし」と言う。ついで、「玉の緒よ絶えなば絶えぬ」という和歌を吟じた。つき添う人々は、これは定家の歌ではなくて、式子内親王の歌なのにと不審がる。そうこうするうち、灯火の消えるようにはかなくなつてしまつたと、宗長の筆になる『宗祇終焉記』は伝える。箱根山のふもと湯本でのこと、時に宗祇は八十二歳であつた。

「夢で定家に会つたと言ひ、「玉の緒よ絶えなば絶えぬながらへば忍ぶることのよわりもぞする」という、式子内親王の歌を吟じたという宗祇の様子から、その背景に、定家と式子内親王との恋の伝承、あるいは金春禪竹作の能「定家」の存在が考えられることは、つとに指摘されている。しかし、それだけではなく、宗祇は定家を夢に見、定家撰とされていた『百人一首』を思い浮かべ、『百人一首』の中でも絶唱とされる式子内親王の「玉の緒よ」の一首を連想して、それを吟じたと思ふこともできる。宗祇は『百人一首宗祇抄』という書名で知られる注釈書を著している。内容に大きな相違は見られないけれども、七回ほども著していることが知られる。宗祇は『百人一首』に深く親しみ、その流布に大きな功績を残したのである。

末期の夢に定家の姿をみたのは、宗祇が定家を、そして定家の享年を意識していたからではあるまいか。藤原定家が没した

のは、仁治二年（一二四二）八月二十日、八十歳の時。文亀二年元日、宗祇は「いにしへのためしに遠き八十だに過ぐるはつらき老のうらみを」という歌を詠んだ。死の数日前に張行された千句連歌では、「今日のみと住む世こそ遠けれ」という前句に、「八十までいつか頼み暮ならん」という句を付けてもいる。定家の享年を越えた時、すでに宗祇は、残照の生を送っていることを意識していたのかもしれない。

宗祇の最後の自撰句集『宇良葉』は、四四二句の発句に、三つの独吟百韻を添えたもの。発句のうち四二八句までは春夏秋冬の四季に整然と部類されている。のこる十四句の冒頭には、「明応九年、予、八十にみちて、会席の交はりどめ侍る」と記している。定家の享年と強引に結びつけるつもりはないけれども、明応九年（一五〇一）に八十一歳をむかえた宗祇が、連歌の会席での活動をやめようと考えたことは確かである。『宇良葉』の末尾に位置する「本式連歌何人百韻」は、明応五年正月に清水寺で詠まれた宗祇の独吟。前年に『新撰菟玖波集』を完成し、連歌の本道をあらためて回顧して詠んだものと考えられている。なかに「こころならでも世をやつくさん／玉のをのためるをまてばあやにくに」という句が見られる。恋の句ではないけれども、式子内親王の「玉の緒よ」の一首をふまえて、発想を逆転させた句であることは言うまでもない。

能「定家」の素材のひとつに、式子内親王と定家との恋の伝承がある。定家についての様々な伝承は、定家の没後まもなく鎌倉時代後期から生じていた。内親王との恋の伝承も、それらしきものの発生は早い。佐藤恒雄氏の指摘されたように、『後深草天皇宸記』の文永二年（一二六五）十月「後嵯峨院御幸御記」の十七日条には、式子内親王が「生きてよもあすまで人は（「人も」とも）つらからじこの夕暮をとば問へかし」（『新古今和歌集』恋歌四）という歌を、後鳥羽院に詠進する前に定家に送ったという記事が見られる。後嵯峨院が西園寺実氏から聞いた話で、このエピソードを西園寺実氏は定家から直接に聞いたというのである。定家が没した時、実氏は四十七歳。妻の甥で継嗣為家の従兄弟であり、処世にたけた頼りがいのある実氏に、定家がそのような話をしたことは十分に考えられる。

問題は、式子内親王が定家に送った「生きてよも」という歌が、恋歌であったということだ。『新古今和歌集』の詞書によれば、ある百首歌（未詳）のなかの一首であったという。けれども内親王は、百首歌として詠進する前に定家に送ったらしいのである。定家に、この歌の批評を求めただけなのかも知れない。あるいは「秘儀めかした戯れ」であったかも知れないとも言われる。けれども、恋歌は恋歌である。こうしたエピソードが増幅されて、あるいはない恋物語が生じていった様子は、伊藤正義氏の『謡曲雑記』（和泉書院、一九八九年四月）に、簡潔にまとめられている。「生きてよも」という歌の異伝と見られる、「ながらへてあすまで人はつらからじ此夕暮にとわばとへかし」という歌を内親王が定家に贈ったと伝える、『源氏大綱』という書物が紹介されている。

『源氏大綱』は禅竹の時代には成立し、禅竹が読んでいたか

どうかはともかく、そこに記される式子内親王と定家との恋物語を、禅竹が見聞していた可能性は大きいとされる。『源氏大綱』によれば、後鳥羽院の勅命によって別れを余儀なくされた時、定家は「せめてげに今ひとたびのあふ事は渡らん川やしるべなるらん」という歌を詠んだという。実際には建久二年（一一九二）六月、九条良経に命じられて詠んだ伊呂波四十七首のうちの恋歌で、初句は「せめて思ふ」、結句は「契りなるべき」。せめてもう一度逢いたい、けれど次に逢えるのは手をたずさえて三途の川をわたる時、それがあなたとわたしとの定めなのだろうか。定家の自撰した『定家卿百番自歌合』に収められることから、自信作であったと見てよい。その後、四辻善成『河海抄』の真木柱に引用されて、源氏物語注釈書の世界に流入してゆく。しかし、内親王と定家との恋物語の中に位置づけられると、定家の内親王に対する執心の深さをあらわす歌に変貌してしまった。定家の日記『明月記』によると、定家が初めて式子内親王の御所に参上したのは、治承五年（一一八二）正月三日のこと。定家二十歳の春、内親王は三十三歳であった。御召によって参上した定家は、たちこめる薫物の香りに陶然となった。父の後成は内親王の歌の師であり、定家の姉二人が内親王に仕えていた。俊成と共に同年九月二十七日に伺候した時、内親王は筆を弾じていた。『明月記』に描かれる内親王の姿は、雅びな貴人そのものである。建久三年四月二十八日には、内親王に水晶の数珠を献じてもいる。『明月記』が人の目にふれることはほとんどなかっただろうけれども、それに見られるエピソードなどない出話として、西園寺実氏のような身近な人物に、晩年の定家が語ったということも考えられなくはない。定家卿、もしや噂の元凶はあなただったのではありませんか？

謡曲「定家」の詞章には、定家の家集『拾遺愚草』の歌が巧みに取り入れられている。時雨の亭ちんの由来とされる、「時雨時を知るといふ心を、偽りのなき世なりけり神無月たがまことより時雨れそめけん」という歌は、『拾遺愚草』以外に、『続後拾遺和歌集』などによっても知ることが出来る。しかし、「その詞書に私の家にと書かれたれば」ということは、『拾遺愚草』を見ていなければ知られない。詞書の下に小さく書き添えられた「私家」の二文字は、定家の自邸での歌会で詠まれたことを意味する。『漢書』や『旧唐書』などの漢籍に由来する語で、『万葉集』などにも見られる。けれども、私家集では『拾遺愚草』に四、五例みられ、定家の独特な用語であることが知られる。

「あはれ知れ霜より霜に朽ち果てて世々にふりにし山あゐの袖」(『拾遺愚草』第四句「四代にふりぬる」という歌は、『拾遺愚草』では「賀茂社歌、社頭述懐」という詞書を有する。そのことをふまえて「袖の涙の身の昔、憂き恋せじと禊せし、賀茂の斎いその宮にしも」と続けている。また、「げにや、歎くとも恋ふとも逢はん道やなきみ葛城の峰の雲、と詠じけん心まで」は、『拾遺愚草』では第五句「峰のしら雲」「葛城」から、続く「思へばかかる執心の、定家葛と身はなりて」の「葛」を引き出す。それだけでなく、前の「雲の通ひ路絶え果てて、をとめの姿とどめ得ぬ」とも、密接に結びついている。ここは、『百人一首』にも取められる「天つ風雲の通ひ路ふきとちよ乙女の姿しはしとどめん」(『古今和歌集』雑歌上)という、僧正遍昭の有名な歌をふまえている。五節の舞姫を見て詠んだ歌だが、五節の舞は、天武天皇が吉野宮で琴を奏した時、天女が天下つて舞ったことにちなむと伝える。平安時代からの伝承だが、中

世の古今和歌集注釈書などにも記され、広く知られていた。『連珠合璧集』に「山伏トアラバ、苔の袖 … かつらぎ山 吉野」と見えるように、吉野と葛城とは修験の山として並び称されてもいる。

「心の奥のしのぶ山」は、「恋ひわびぬ心の奥の忍山露も時雨も色にみせじと」を、「いやいづれとも定めなき、時雨の頃の年々なれば」は、あるいは「定めなき時雨の雲のたえまかなさてや紅葉の薄く濃からん」を、さらに「さまざまなりし情けの末、花も紅葉も散りぢりに」の「花も紅葉も」は、多くの歌に見える句であるけれども、三夕の歌として有名な「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦のほとま屋の秋の夕暮」をふまえた表現と見なすことができる。「定家」の詞章は、『拾遺愚草』の歌を巧みに織り込みながら作られている。

それに対して式子内親王の歌は、「玉の緒よ」という一首が引かれているだけである。『新古今和歌集』恋歌一に取められていることはもちろんだが、定家撰とされていた『百人一首』の歌であることに着目する必要がある。禪竹「定家」に織り込まれている歌は『拾遺愚草』の歌を除くと、『古今和歌集』や『伊勢物語』の歌も見られるけれども、さきの僧正遍昭の「天つ風…」、藤原敦忠の「逢ひみての後の心に…昔はものを思はざりけり」、平兼盛の「忍ぶれど色に出でにけり…」と、『百人一首』に取められている歌が多い。『拾遺愚草』の歌と並んで『百人一首』の歌を引用し、詞章に織り込むというのは、禪竹が「定家」を作るにあたっての戦略であったと考えられる。宗祇が定家の作品として重視したのと同じく、『百人一首』は禪竹にとっても、『拾遺愚草』とならぶ定家の重要な作品であったことを、「定家」の詞章から読み解き得るように考えている。